

消費者への食品安全情報の伝え方

公益社団法人

日本消費生活アドバイザー・コンサルタント協会

食生活特別委員会副委員長 蒲生恵美

本日の内容

- 消費者への情報提供で気をつけること
リスク認知の観点から“対象に合わせたアクション”
- メディアへのアクション

最近の食の安全（リスク）報道

- 不二家期限切れ牛乳使用事件（2007年1月）
- ミートホープ食肉偽装事件（2007年6月）
- 白い恋人賞味期限偽装事件（2007年8月）
- 比内地鶏偽装事件（2007年10月）
- 船場吉兆期限・産地表示偽装事件（2007年10月）
- 赤福製造日偽装事件（2007年10月）
- 崎陽軒原材料不適正表示事件（2007年11月）
- 中国製ギョウザ薬物混入事件（2008年1月）
- 台湾産うなぎ偽装事件（2008年3月）
- 飛騨牛偽装事件（2008年6月）
- メラミン混入粉ミルク加工食品事件（2008年9月）
- 事故米不正転売事件（2008年9月）
- 中国製冷凍インゲン薬物混入事件（2008年10月）
- 伊藤ハム地下水汚染事件（2008年10月）
- 花王エコナ問題（2009年9月）
- 福島第一原発事故による食品の放射能問題（2011年3月～）

安全性では問題とならないレベルや
安全性ではなくコンプライアンスの問題がほとんど
しかし一様に「食の安全が脅かされる問題」と報道

赤字は国内で健康被害発生

報道への取り上げられ方の特徴

- リスクの程度に比例しない（前頁）
 - 同程度のリスクでも取り上げられ方に差
 - ✓ エコナ（グリシドール脂肪酸エステル）とポテトチップス（アクリルアミド） 参考1
 - ✓ “トクホに発がん物質”報道（エコナとキリンメッツ） 参考2
 - 海外との差（ニュースバリューに差？）
 - ✓ モンサントGMコーン発ガン性（仏セラリーニ氏のラット実験） **報道**
 - 欧米：研究結果が否定されていることを報道
 - “Study on Monsanto GM corn concerns draws skepticism”(Reuter’s)
 - “GM Corn-Tumor Link Based on Poor Science”(Discovery News)
 - 日本：ほとんど報道なし（NHK BS）
- ※問題がある研究結果を“問題だと伝えない”こともリスクの程度が伝わらない
無関心（記事にならない）は偏向報道とともに問題

安全性で問題とならないものがなぜ 「食の安全の問題」として報道されるのか

- リスク≠リスク認知
 - 「人間は事実ではなく、認知で反応する」(O.Renn)
 - 危ないものでも危ないと感じなければリスクと捉えない
 - 危なくないものでも、危ないと感じればリスクと捉えてしまう
 - リスクとリスク認知のズレ
 - 知識不足によるもの : 教育・啓発で対応できる分野
 - 知識不足によらないもの : リスク認知研究の分野
 - タバコ : 健康に危害を及ぼすものと知っている
 - GMO : 反GMOは安全性審査の仕組みを知らない訳ではない
- ※正しい情報を与えれば、リスクの程度に沿った反応をするとは限らないということ

“安全でも安心できない” 安全と聞かされても納得できない思いが食の問題(→食の安全の問題)として報道される。安全といいながらその本質は安心に関する問題であることが多い。**安全と安心の混同**

リスク認知

- ①（おそらくどの国にも）
共通する一定のパターン
- ②その国の文化によるもの

(O.Renn 「リスク認知と食品安全のリスクコミュニケーションの関係」)

①共通する一定のパターン (リスク認知の2因子)

- 恐ろしさ因子(dread risk)

コントロールできない

強制される

平等でない

- 未知性因子(unknown risk)

将来どうなるか
わからない

観察できない

新リスク

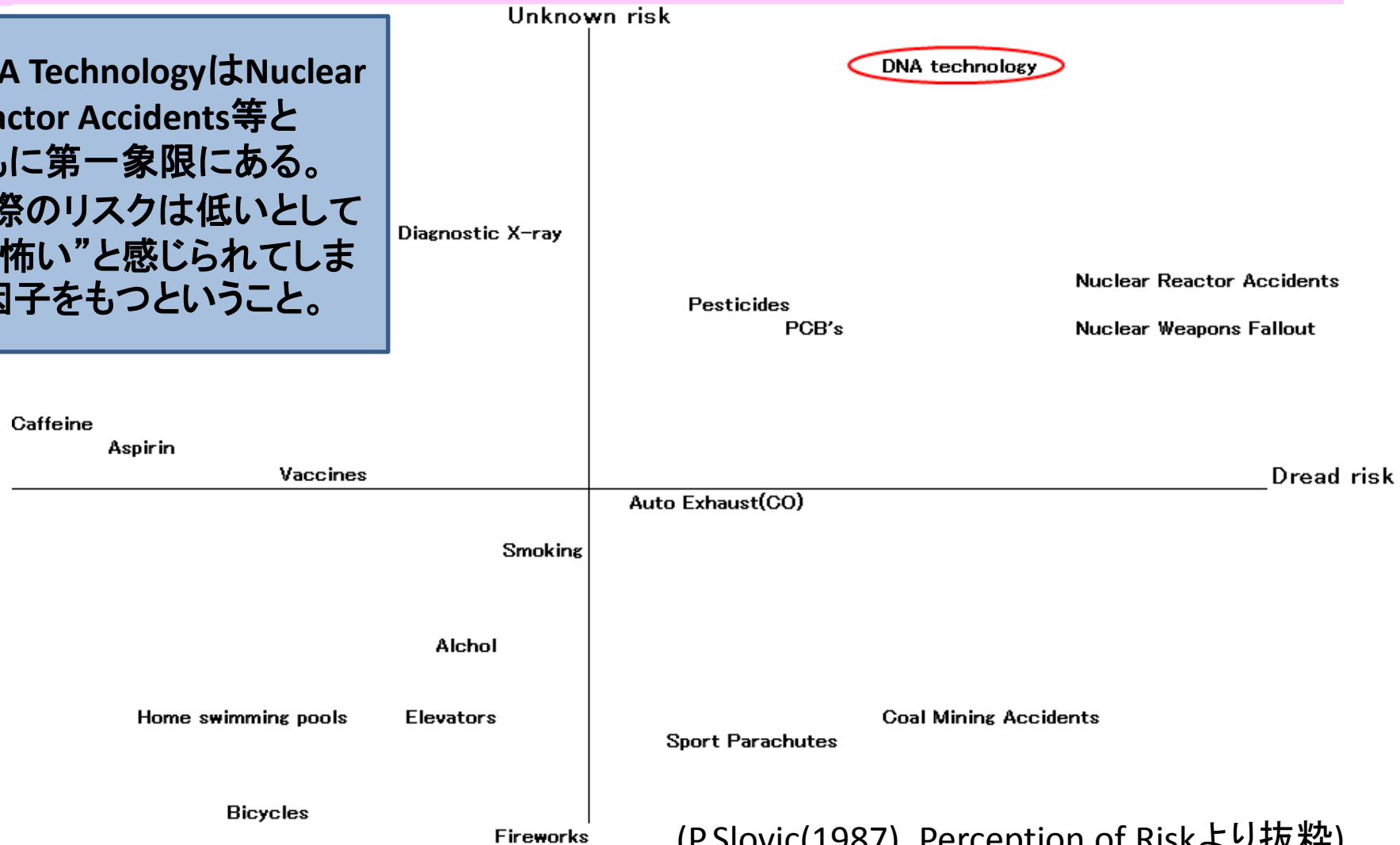
(P.Slovic(1987), Perception of Risk)

※そのものが上記の特徴を持つかどうか（事実）ではなく、上記のように感じられる（認知）と、実際はリスクの程度が低くても“怖い”と感じられてしまうということ

※欧米だけでなく日本でも2因子が調査で確認

Unknown risk / Dread risk Map

DNA TechnologyはNuclear Reactor Accidents等とともに第一象限にある。実際のリスクは低いとしても“怖い”と感じられてしまう因子をもつということ。



(P.Slovic(1987), Perception of Riskより抜粋)

遺伝子組換え作物をめぐる 専門家らと市民の意識のズレ

専門家ら※

- 根本的な問題は一般市民が科学的事実は無知であること
- 市民はGMOに賛成か反対かのどちらか
- 市民は誤ってGMOは不自然なものだと考えている
- 市民が行政を信用しないのはBSE対策の失敗が原因
- 市民はゼロリスクを要求しているがこれは不合理である
- GMOに対する市民の反対は、倫理的または政治的な「他の」要因によるものである
- 市民はメディアのセンセーショナルな報道の犠牲者

※研究者・バイオテクノロジー企業・行政等

遺伝子組換え作物をめぐる 専門家らと市民の意識のズレ

市民

- GMOを利用することで利益を得るのは誰か？
- GMOを開発を行うべきだと決定したのは誰か？
どうやって決めたのか？
- GMOが市場に出回る前になぜもっと情報を与えられなかったのか？
- GM製品を買うか買わないかの選択についてなぜもっと効果的な手段が与えられないのか？
- リスクは真剣に評価されているか？誰がどのように？
- 規制当局はGM開発企業を効果的に規制できるか？
- 解消できない不確実性や未知の事柄は、意思決定のなかでどのように考慮されているのか？
- 予見されない有害な影響が生じた場合の救済策は？
- 予見されなかった被害が生じた時は誰がどうやって責任をとるのか？

平等性・公平性

強制・選択権

コントロール・規制

将来の不確実性
に対する対応は？

遺伝子組換え作物をめぐる 専門家らと市民の意識のズレ

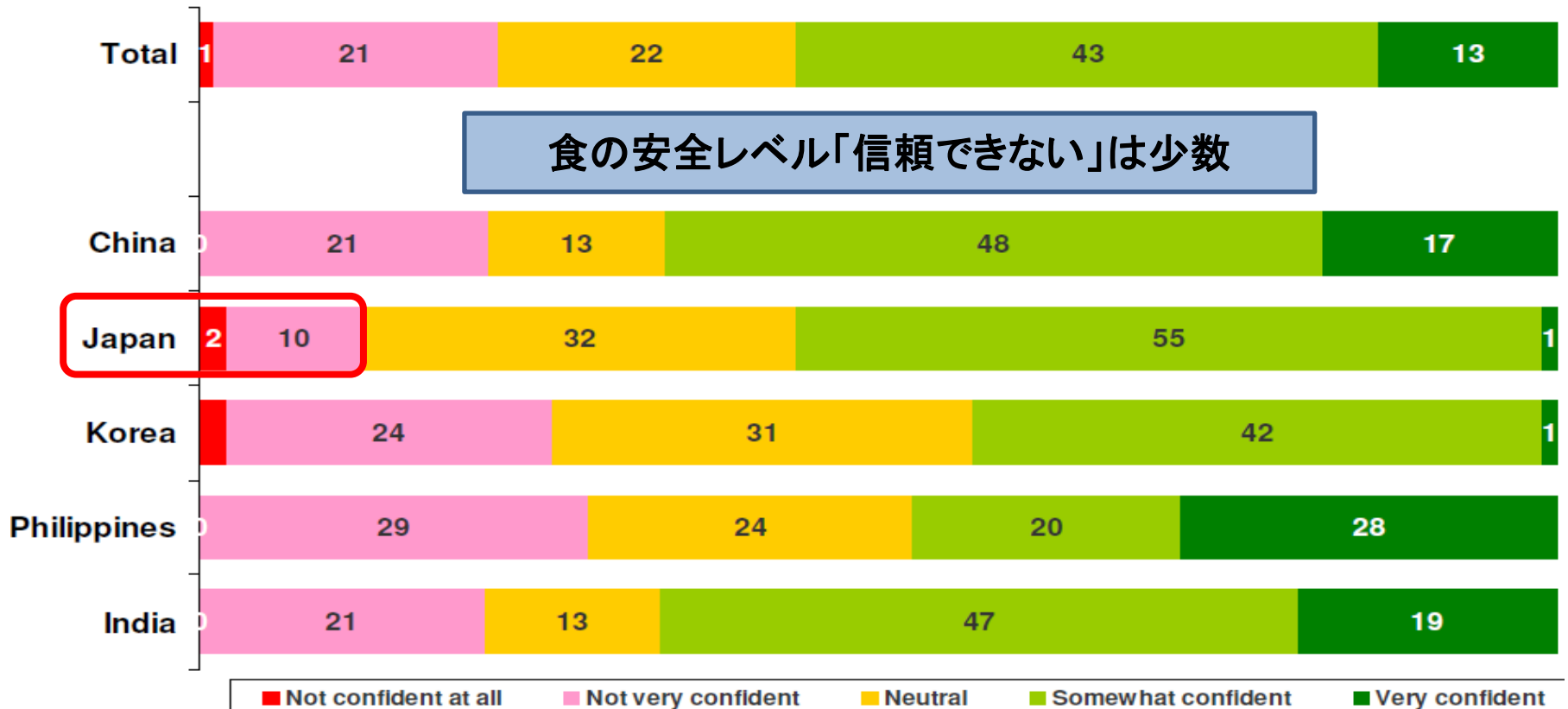
- 参加した市民の遺伝子組換え作物に対する意識は、専門家らがイメージしたような知識不足による誤解や、不合理なゼロリスク要求ではない
- 市民の指摘したポイントは、リスク認知の2因子「恐ろしさ」「未知性」や英国ILGRAが指摘したポイントに通じる
- 専門家らと市民の意識のズレは注目するポイントの違いによるもの

※科学的に正しい情報を伝えるだけでは十分とはいえない

※市民のリスク認知のポイントをふまえた情報提供・コミュニケーションの必要性

②その国の文化によるもの

Q : When talking about food safety , how confident are you with the food safety level for consumption in your country? (n=1,007)



Consumer perceptions of food biotechnology in Asia(2008),AFIC

食の安全で最も関心が高いのは (食品衛生ではなく) 偽装表示

Q : What , if anything are you concerned about when it comes to food safety?

(n=1,007)

Spontaneous food safety concerns

	China	Japan	South Korea	Philippines	India
n=	200	201	202	200	204
%	%	%	%	%	%
Deceptive Labeling	19	58	31	20	19
Hygiene	0	0	0	15	19
GM Food	0	2	6	0	0

日本の食の安全は
食品衛生レベルではなく
「信頼関係」が問題視

Consumer perceptions of food biotechnology in Asia(2008),AFICより一部抜粋

リスク認知のカテゴリー

対象をどのようにリスク認知するかレベル

対象によって主にどちらのレベルに入るか傾向はあるが

同じ対象でも人によって異なりうるもの

(同じ人でも対象によって異なりうるものでもある)

①技術的問題レベル

②世界観問題レベル

(Cvetkovich・Wiedemann)

①技術的問題レベル

- 単なる科学技術問題と認識
- 情報が情報提供者の意図通りに伝わりやすい
(ポジティブ情報・ネガティブ情報いずれの場合も)
- 教育、啓発が可能

<調査>

学生にGMOに関する2本のDVDを見せ、同じアンケートを3回実施
情報提供前/ネガティブDVD後/ポジティブDVD後

<結果>

ネガティブDVD視聴後はGMOに否定的な回答が増えたが、
ポジティブDVD視聴後は情報提供前レベルにほぼ回復

※参加学生はGMOに対して、情報次第で意識が変化

この学生にとってGMOは技術的問題レベルにある

※アンケート結果の解釈に注意が必要

情報提供後の大きな意識変化に喜んで良いか？

→別の情報でまた簡単に変化する可能性も留意すべき

②世界観問題レベル

- 価値観が絡む問題と認識
- 情報提供しても、情報提供者の意図とおりに伝わりとは限らない
- 受容のためには情報提供（教育・啓発）では不十分。リスクコミュニケーション（双方向コミュニケーション）が必要。
- **信頼関係**がないと受容されない

<双方向コミュニケーション>

自分の伝えたいことを一方的に伝えるのではなく、
相手が何を知りたいか、こちらに何を伝えたいか考え、
そのニーズをふまえて情報提供し合う場 <**相互理解**>
※コミュニケーションとプレゼンテーションとの違い

信頼関係の重要性

- 信頼関係のあるところでは、
情報はリスクとベネフィットのバランスで捉えられる
- 信頼関係のないところでは、
情報は受け入れられずゼロリスクが要求される

(O.Renn「リスク認知と食品安全のリスクコミュニケーションの関係」)

ゼロリスクはあり得ないことを知っている市民が大半。防衛反応もしくは責任追及としてのゼロリスク要求。

信頼を導く要素

① 伝統的信頼モデル

② 主要価値類似性モデル (SVSモデル)

①伝統的信頼モデル

イエールコミュニケーション研究プログラム以来の伝統的な見解。以下の2つの要素が信頼を導く、という考え方

- 能力(Competence) 認知
専門知識や技術、経験があると認知されること
- 動機(Motivation) 認知
誠実・公正であると認知されること

伝統的信頼モデルに基づく様々な試み

- GM Nation (イギリス)
- コンセンサス会議 (デンマーク、日本)

等

重視されたポイント「能力」「動機」

- 情報の専門性、適切なタイミング
- 意思決定のプロセスが公開されていること
- 消費者の参加の機会が確保されていること

※確かに会議ではGMOにYesは出たが・・・

能力・動機をそなえても必ずしも信頼されない！？

②主要価値類似モデル（SVSモデル）

- リスク認知研究の新たなモデル(Cvetkovich,中谷内ら)
- 主要価値類似性(Salient Value Similarity)認知
対象への主要な価値観を共有していると認知されると信頼を導く、という考え方

【信頼形成における伝統的信頼モデルとSVSモデルの関係】

- 調査

リスク管理機関への信頼は何によって導かれるか

題材：花粉症緩和米

花粉症緩和米への高関心者・低関心者別に調査

- 結果

高関心者：主要価値類似性

低関心者：動機（公正さ）

※能力認知は信頼との結びつきが弱い

以上までのまとめ

- 人間が怖い（リスク）と感じるものには一定の傾向があり、それは必ずしも実際のリスクの程度とは合っていない
 - 報道に見られる「安全と安心の混同」→市民の根拠なき不安
- 人間が怖い（リスク）と感じるレベルにカテゴリーがある
 - 技術的問題レベル：単なる科学技術問題と認識：教育・啓発が可能
 - 世界観問題レベル：価値観が絡む問題と認識：信頼関係構築が必要
- 信頼を導く要素
 - 伝統的信頼モデル：能力（知識・経験）動機（誠実・公正）認知
 - 主要価値類似モデル：対象への主要な価値観を共有していると認知
- まとめ

関心度	信頼を導く主要要素	リスク認知レベル	アクション
対象への関心が高い	主要価値類似	価値観が絡む問題と認識	リスク・コミュニケーション (双方向)
		単なる科学技術問題と認識	教育・啓発 (関心を”起こす”から”高める”まで)
対象への関心が低い	動機（公正さ）	無関心	サイエンス・コミュニケーション (一方向・双方向)

メディアへのアクション

メディアの報道姿勢・体制の問題

- スペシャリストよりもジェネラリスト
（⇔ 欧米の科学ジャーナリスト）
 - ニュースの“旬”
報道量の時間的推移（時間的・質的取材不足）
「最終的にどうなったか」は伝えない
 - 危険情報に偏りがち
購買部数や視聴率UP 誤報の場合の世間の反応
 - 分かりやすさ（安全か危険かの二分法的表現）
リスクの程度が正確に伝わらない
- 実際のリスクの程度と情報のトーンに大きなズレ
安全性で問題とならないものが「食の安全を脅かす事件」と報道

メディア応援活動：伝える

- メディアセミナー
国立がんセンターがん対策情報センター実施のセミナー
食品分野でもメディアセミナーが活発化
- サイエンスメディアセンター（英・加・米・豪・日など）
メディアへの情報提供のみならず、科学者へメディアトレーニング
科学者とメディアをつなぐ活動
- メディアガイドライン
情報の受け手がリスクの程度を判断できる情報を
メディアに発信していただくための提案

「メディアの方に知っていただきたいこと
（遺伝子組換え作物・食品）」

NPO法人くらしとバイオプラザ21

<http://www.life-bio.or.jp/topics/topics461.html>



メディア応援活動：評価しとともに考える

- メディアドクター（評価）

医療記事を第三者が10項目で評価（オーストラリア・アメリカなど）
日本でも2007年に医療者・学者・**記者**によるグループがスタート
「必要以上にあおっていないか」「科学的根拠の質」「記事で紹介された
治療法のコスト対効果」「治療効果の定量化」「紹介した治療による副
作用（リスクトレードオフ）」など

- 食品安全情報ネットワーク（電話・レター・面談）

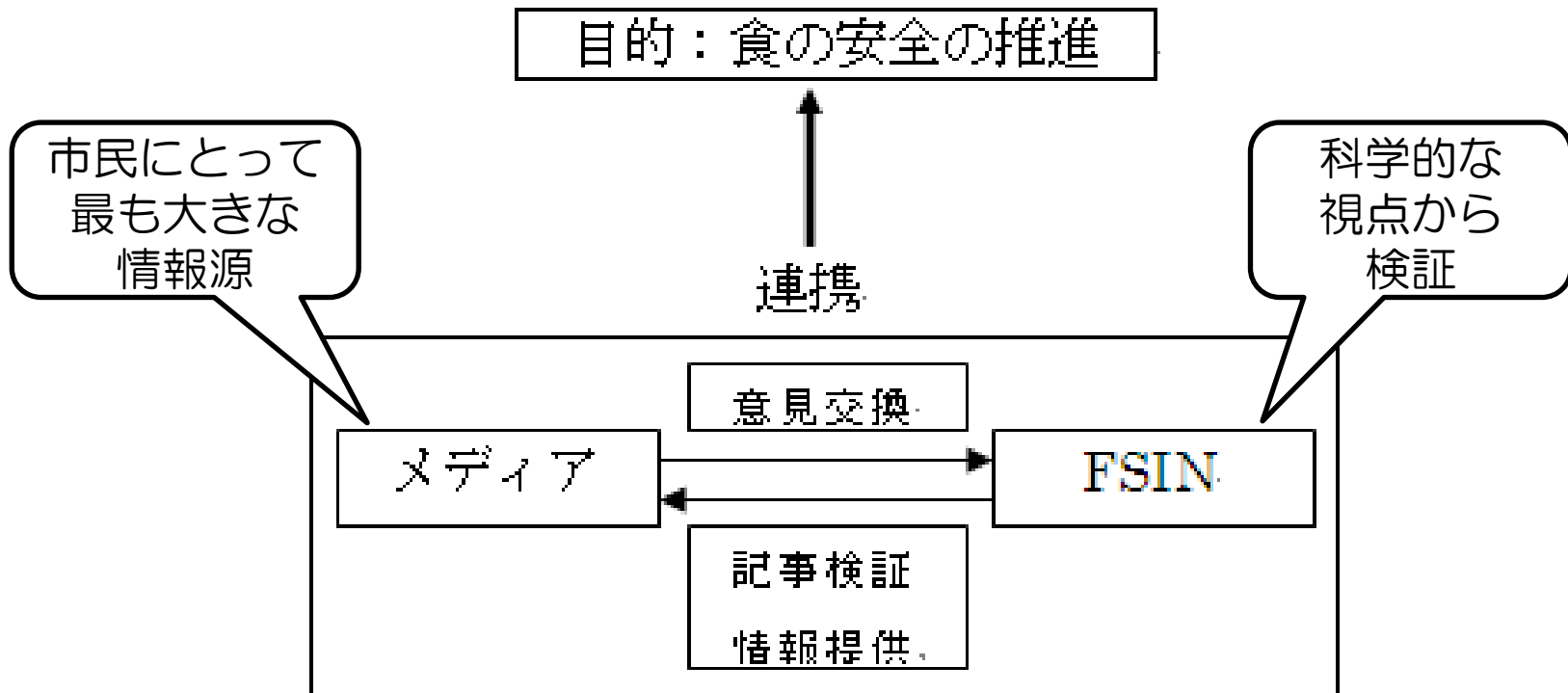
消費者・学者・事業者・**記者**らが食の安全情報を科学的に検証し、科学的に間違った情報には情報発信者等へ連絡し面談等を実施して改善策をともに探る活動。自らも正しい情報を理解しやすい形で発信していく。

【実施例】

- TPP関連記事で遺伝子組換え表示制度を安全基準と報道（日経・東京）
- 「化学肥料遺伝子ゼロ米挑む福島の試み、宮崎で再出発」（読売）

<http://sites.google.com/site/fsinetwork/>

食品安全情報ネットワークの活動目的



FSINは、メディア報道の科学的な正確性を高めるために、外部から応援する活動団体です。
メディアとの関係を構築し、ともに食の安全の推進に寄与できる団体となることを目標としています。

これまでの活動実績

<アクション→回答&意見交換>

- 婦人公論「最も危険な添加物の見分け方」編集部との意見交換（2008.11）
- 枚方市消費生活センター：講演者選定についての質問→回答・意見交換（2010.2）
- まんが『美味しんぼ』に訂正要求→編集部との意見交換（2010.7）
- 町田市消費生活センター：講師選定について意見交換（2010.7）
- アエラ「真実に目をふさぐ『政治的安心』機関」編集部との意見交換（2010.9）
- 東京新聞「チェックTPP Q&A」への要望（2013.3）

<アクション→記事掲載>

- 静岡大学・読売新聞共催「市民講座」への訂正要求→FSIN代表の記事掲載（2010.6）

<アクション→回答>

- 農林水産大臣：遺伝子組み換え作物リーフレット回収への抗議・再開要望→回答（2010.6）
- 内閣府・佐賀県：食育推進全国大会での講演者選定への質問→回答（2010.5）
- 日本人間ドック健診協会「健康読本『もっと』」への質問→回答（2010.8）
- 読売新聞「コンビニ弁当もチルド登場」への要望→回答（2010.10）
- 河北新報「牛肉輸入制限緩和して安全性保てるのか」への要望→口頭回答（2011.11）
- 毎日新聞「風知草 豆腐から見たTPP」への要望→回答（面会依頼への回答なし）（2011.11）
- 信濃毎日新聞「遺伝子組み換え菜種の自生拡大」情報提供とお願い→回答（2013.2）
- 共同通信「遺伝子組み換え菜種の自生拡大」情報提供とお願い→回答（2013.2）

これまでの活動実績

<アクション→回答なし>

- 京都新聞「免疫力には手作りご飯」への質問→回答なし（2010.7）
- 公明新聞「遺伝子組換え食品の安全性」への要望→回答なし・情報提供（2010.9）
- ゼンショー：ウェブサイトBSE関連情報への質問→回答なし（2010.12）
- 日本経済新聞「きれい好きの落とし穴」への質問→回答なし（2011.2）
- 静岡新聞「遺伝子組み換え菜種の自生拡大」情報提供とお願い→回答なし（2013.2）

<意見・情報提供>

- 読売新聞「化学肥料遺伝子ゼロ米挑む福島の試み、宮崎で再出発」への意見（2011.6）
- 日本経済新聞「TPPを知る⑤」への意見（2011.11）
- 東京新聞「交渉参加TPP Q&A⑤」への意見（2011.11）
- 読売新聞「「遺伝子食品」表示基準緩和 TPPの対象外」への意見（2012.3）
- 佐賀新聞「免疫力高める生活は 藤田教授（東京医科歯科大学）が講演」への意見（2012.4）
- 石原都知事「新聞報道における遺伝子組み換え食品の安全性に関するご発言について」情報提供（2012.9）
- 東京新聞「こちら特報部 食品表示一元化へ」情報提供（2012.9）
- NHK BS「9月21日ワールドWAVEモーニングで紹介された遺伝子組み換えトウモロコシの実験に関する情報提供」（2012.10）

静岡新聞・信濃毎日新聞・共同通信への アクション

- 静岡新聞に「組み換え菜種自生拡大、交雑も」掲載（2013年1月21日）
- 信濃毎日新聞に「遺伝子組み換え菜種の自生拡大」掲載（2013年1月28日）
- “内容に問題のある記事”とFSINメンバーへ情報が入る（2013年1月末）
- FSIN内で記事検討・レターを出すことを決定・レター準備（添付資料について中嶋氏への確認含む）（2013年1月末～2月初）
- 静岡新聞・信濃毎日新聞の読者センターへ電話し、主旨を伝えてレターの送付先を確認（2013年2月初）
- 静岡新聞・信濃毎日新聞 編集局長宛にレター（情報提供と追加報道依頼）送付（2013年2月4日）
- 信濃毎日新聞 編集応答室「記事は共同通信の配信掲載」（2013年2月5日）
- FSIN内で共同通信宛のレター準備（2013年2月5日）
- 共同通信サイトの窓口情報に電話番号がないため、サイトにある住所に編集局長宛のレターを送付（情報提供と追加配信、面談依頼）（2013年2月8日）参考3
- 共同通信社科学部長よりメール回答（追加配信・面談への回答はなし）（2013年2月18日）
- 共同通信社科学部長へメール返信（追加配信・面談再依頼）（2013年2月19日）
- 共同通信社科学部長と電話で意見交換「FSINの指摘はよく理解した。今後の取材・配信の参考にする」旨の回答があった。（2013年2月26日）

レターの主なポイント

記事内容

- 雑草のハタザオガラシとの交雑とみられる個体も三重県で見つかった
- 市民団体によると、組み換え菜種は、在来の菜種や、同じアブラナ科のカラシナやハクサイ、コマツナなどと交雑する恐れがあり、実際に国内でカラシナや在来の菜種と交雑した個体が生えているのが確認されている
- 事態は深刻化しているが、国は「制御できないほど広がったり、在来種を駆逐したりすることはない」との立場を貫く

指摘事項

(1つめは共同通信のみに情報提供)

- ナタネと交雑可能な近縁種リストにハタザオガラシはなく交雑の事例報告もなし
- 2010年にもこの市民団体に関する同様の報道があったが、当該市民団体が分析を依頼した国立環境研究所の分析結果は交雑を否定（分析結果添付）
- 食料・飼料・環境影響評価をパスしたものだけが流通できる仕組み
- 国の調査では在来ナタネとの交雑は確認されたが、カラシナとの交雑は確認されていない
- 【お願い】読者が情報を適切に理解するには市民団体の見解だけでなく国の見解も必要。国への取材&追加報道を希望

<よく報道される誤解>「交雑体が（1つでも）発見＝事態は深刻」
⇔種がこぼれば交雑体が生える可能性はある。しかしその種が環境影響評価をパスした承認済み遺伝子組換え作物であれば、生育を広げるなど環境に悪影響を及ぼす心配はない。大事なことは交雑したかどうかでなく、承認済みの遺伝子組換え作物か否か。

共同通信社科学部長と電話での意見交換

共同通信社科学部長

- FSINの指摘はよく理解した。今後の取材・配信の参考にします。
- （質問）記事にある市民団体の主張の問題点は何だと思うか。

質問に対する当方のコメント

- 問題点はたくさん指摘できるが、1番のポイントは、こぼれ種が芽を出し交雑することはあらかじめ環境評価で問題がないレベルに収まること確認されているということだ。
- 今後の取材の際にぜひチェックしていただきたいことは、それが安全性審査承認済みの遺伝子組換え作物か未承認のものかだ。承認済みであれば、その種が芽を出すことは想定内の出来事だ。それを問題だとするのであればその理由は何か。
- それでも「芽が出てはならない」と主張するのであれば、輸入を止めなくてはならなくなる。輸入はして豊かな日本の食卓を享受しつつ、芽を出しても問題とならないことが確認されているこぼれ種の問題だけを取り上げるのは一方的な主張では無いか。

食品安全情報ネットワークの今後の活動

- 公益財団法人 食の安全・安心財団との連携
 - ✓ 食の安全・安心財団によるメディアへの情報提供（情報交換会）
 - ✓ 食品安全情報ネットワークによる記事検証
 - ✓ 次回情報交換会で検証結果を報告し意見交換実施

※ “書きっぱなし” にさせない活動。食品安全情報ネットワークは、メディア報道の科学的な正確性を高めるために、外部からメディアを応援する団体として活動していきます。

ご清聴ありがとうございました